



羅漢寺の対岸に臨む古羅漢の風景。貴重な石造物が多数点在し、現在では羅漢寺の原所地はこちらであったと考えられる



本堂の脇に残る滝筋の跡(右)と、その斜め上に配された韋駄天(いだてん)(上)。この配置は中国の掛け図に描かれた羅漢の構図とほぼ同じとされる



のない岩窟、すなわち極楽浄土へとつながっているという。
この無漏窟内の五百羅漢は、釈迦如来坐像を中央に、左右に重なり合うように並んでおり、製作年は南北朝期の延文五年(一三六〇年)頃といわれる。
羅漢とは阿羅漢の略称であり、仏教修行の最終段階にいる尊者を表し、己の悟りを得た対象として、かつては修行者の信仰仏



縁結びの地蔵"比丘(びく)"と"比丘尼(びくに)"

今なお歴史のベールに覆われた羅漢寺は、現在も調査研究が進められているが、先人が築いた極楽浄土を目の当りにできる寺として、ぜひとも訪ねてみてはいかがだろうか。
その危険を冒した旅の僧侶、禅海和尚が三十年の歳月をかけて手掘りで掘り抜いた洞門(青の洞門)によって、ようやく参道が築かれたのである。現在では山門までのリフトも設置され、安心して登れるようになっているが。

でもその羅漢信仰は中国の唐で盛んとなり、やがて日本に伝わるにつれて親しみやすい風貌や現世利益と結びつき、庶民信仰の中心として広く親しまれていったのである。その象徴ともいえるのが、釈迦の第一高弟とされる寶頭盧尊者(ビンドラ・バラダージャ)だろう。通称「なで仏」とも呼ばれ、自らの病んだ部位をなでることで除病の功德があるとされている。
しかし、かつての羅漢寺は誰もが気楽に参れる寺ではなかった。そそり立つ断崖にようよう通れる細い道を、鎖一本を頼りに越えなければならず、この難所で命を落とす人も少なくなかったという。

名所旧跡が点在する景勝地



明かり取りの窓

美しい景観と歴史のドラマに触れる
競秀峰と青の洞門

漢学者、頼山陽が命名したとされる耶馬溪。山国川上流に広がる奇岩の風景は、溶岩浸食が作り出した自然が織りなす一大パノラマだ。なかでも絶景ポイントの本耶馬溪の競秀峰。ここには、菊池寛の小説『恩讐の彼方に』で知られる「青の洞門」もある。

旅の僧侶、禅海和尚が、鎖渡しと呼ばれるこの地の難所で人々が命を落とすことを憂い、ここに洞門を築いたのである。ノミと槌だけで三十年かけて掘り抜いた道は、全長三四メートル。現在は、当時の姿とはかなり変わってしまったが、旧洞内には明かり取りの窓やノミ跡がいまも残る。



洞門内に祀られている地蔵菩薩(右)と禅海禅師(左)



当時の面影を残す洞門。手彫りのノミ跡が壁面に残る



正面が当時の青の洞門。右側の道は現在の洞門へ



現在の青の洞門。この右側(川側)に旧洞門の一部が残されている



競秀峰。溶岩浸食が織りなす耶馬溪一の景勝地。左下の川沿いのトンネルが青の洞門

日本一の長さを誇る 耶馬溪橋

青の洞門より下流五〇メートルあたりに架かる。別名、オランダ橋とも呼ばれる八連アーチの石橋で、全長は二一六メートル。石橋では日本一の長さを誇る。その堂々たるフォルムは周囲の景観とも調和していて美しい。完成は大正十二年(一九二三年)、工費は当時の金額で約四万円余り。



耶馬溪橋

三連アーチが近代的な 羅漢寺橋

青の洞門より上流五〇メートルあたりに架かる。当時としては珍しい三連アーチの石橋で、径間が大きくならかなため近代的なイメージを感じさせる。反面、架橋工事は難しく、完成までに二回崩壊したという。全長は八九・〇三メートル、完成は大正九年(一九二〇年)。



羅漢寺橋